



高砂

震 濤 観



石の宝殿研究会 (愛称 石研くらぶ)

所在地 〒676-0805 高砂市米田町米田 1113-27

観濤處 跋文の読み下し

右の観濤處三大字は、亡き児 奕孫の遺墨なり

きのとひつじ

かんゆう

こ

えきそん

いぼく

乙未の秋

かんゆう

たずさ

姫路の東南加茂山の厓に

これを

刻ましむ

ひのえさる

けいこう

おわりを告ぐ

昔、歐陽永叔

の跋、

顔魯公の湖州石柱記あり

言ありてその大書するを深く

刻み、或いは山厓に託するを見る。

その用意未だ嘗って無窮の計を為さざらんや。今竊かに之に擬

するのみ。惟願わくば、風雨の剥がされず、鬼神の護持せられ

んことを。初め是の字特に 公の鉅賞を蒙むり、のち仁寿太夫

に靠し、遂に上石を得て更に幽光を發せんとす。豈亦榮幸なら

ざらんや。児の字は亦大、ひとつの字は分峯、享和 壬戌江戸

に生まる。嘗って読書を好み、旁はら翰墨を弄す。是の字を作

せる時年十又九、後三十二にして逝く。幾末もあらずして孫男

の鶴年も亦夭す。噫今我れ独り老ゆ。姑は哀痛して餘石に題

することに勉むるのみ。

天保七年三月

伍石七十二叟 永根 鉉

(記事)

“跋文の読み下し”は 高砂市松陽学園の平成 12 年 4 年生 第 1 班の課題研究「観濤處と跋文の拓本と調査」から転記させていただきました。

この“三大字”は、姫路藩士であった永根伍石の子、文峰が 19 歳の時の書です。姫路藩家老の河合寸翁が、眺望絶佳の地であるとして、文峰の書を刻ませ、藩主の酒井侯が賞賛しました。“三大字”の左に跋文があり、天保 7 年(1836) 3 月 永根伍石 が 72 歳の時に記したことがわかります。

(転記 石の宝殿研究会)



# 観涛震

保七年(1836)江戸時代後期後半の造立で、文字の  
刻出は生石村石工仲右衛門の作と伝えられている。

(高砂市史 第七巻 石造遺跡より)

## 観涛處 物語・・・ 跋文の文脈を読む(口語訳)

右の「観涛處」の三大字は、我が亡き児 文峯の遺墨です。

亡くなつてから二年後の天保六年の秋に 江戸から姫路へ役人として参り、自から担当して、姫路の東南にある加茂山の厓にこの三文字を刻ませました。 工事は天保七年の春に終わりました。

昔の中国北宋の政治家・文人である欧陽永叔の跋文に、顔真卿の忠臣で書家の顔魯公の湖州石柱記があります。 その大きく書いた文字を深く刻んで、山の崖に写されたのを見ました。その準備は今までかつて為し得なかつた無限の計りごとでした。 今、人知れずにこれをなぞらえただけです。

惟、願わくば この文字が風雨に剥がされず、神仏に守り保たれることを願います。 この文字は時の姫路藩主 酒井忠実公から大変な賞賛を受け、姫路藩家老 河合寸翁道臣隼之助さまにお世話になり、遂に認められ、更に不思議な光を発しています。 本当に映えある幸せと思

っています。 子供の名前は亦大、一つの字は文峯と言います。 京和二年に江戸に生まれ、生前には読書を好み、合わせ、詩文・書画を描いて楽しんでいました。 この文字を書いた時は十九歳

でした。その後、三十二歳に死去してしまいました。 間もなく 孫の鶴年も若死してしまいました。

た。

今、私一人老いていきます。一時は嘆いて・溜息してわが身の不幸を口実にする日々でした。

天保七年三月。

伍石 永根鉉 七十二歳

天保九年七月二十日歿、享年七十四歳